

東洋大学史ブックレット

10



東洋大学

建築史から見た東洋大学の変遷

内田 祥士

東洋大学史ブックレット

10

建築史から見た東洋大学の変遷

内田 祥士

目次

はじめに	1
一 白山移転まで	2
二 白山移転から敗戦まで	11
三 敗戦から高度成長期まで	23
四 高度成長期	31
五 立地規制の導入とその解除	41
最後に	49

はじめに

この小冊子は、建築史という視点からの東洋大学のキャンパスの歴史、取分け白山校地の変遷を概観したものです。建築史という些^{いささ}か聞きなれない分野が、この小冊子を貫く視点です。ところで、みなさんにとって、例えば美術史なら自然に耳に入ってくるはずですね。しかし、建築史というのは、些か耳慣れない分野ではないかと思えます。勿論、それには理由があります。この専門分野が建築学科にあり、建築学科が、多くの場合、工学系の学部にあるためです。工学系ということは、歴史を扱っているにも関わらず、理科系であるということです。歴史は文科系、それも文学部史学

科という一般認識からすれば、相当遠いところにある訳です。これが、耳慣れない理由です。私も大学受験は理科系でした。その建築史から見た、東洋大学の歴史です。この冊子を読み終えると、今、みなさんが日々学んでいる東洋大学の歴史の、通常とは些か異なった一面に触れることが出来る、そうお考えください。では、東洋大学のキャンパス特に白山キャンパスの校地と建築に注目しつつ話を進めていきたいと思います。

一 白山移転まで

本郷竜岡町時代

東洋大学の前身、哲学館を学祖井上円了が創立したのは明治二〇年のことです。麟祥院内の教場は、僅か二七畳半、全体でも二四坪（量の部屋に換算して四八畳程度）でした。哲学館の創立趣意書には哲学専修の一館を創立し、これを哲学館と称し、世の大学の課程を経験する資力の無い人々、原書に目を通す機会に恵まれない人々に哲学を講じる場としたい旨のことが書かれています。井上円了が提出した私立学校設置願には左のように書かれています。

一、設置ノ目的 本校ハ哲学諸科ヲ教授シ専ラ速成ヲ旨トス

一、名 称 哲学館ト称ス

一、位 置 本郷竜岡町三十一番地

本郷竜岡町三十一番地は、現在の文京区湯島四丁目で、麟祥院は今もそこにあります。一方、この願を受けて出された認知通知には、その具体的な規模が次のように記さ

れています。

敷地ナシ 建物ノ図面 借用平屋 間口 三間

奥行 八間半

此坪数二十四坪也との記述と共に

図面には、教場 二十七畳半

受付応接所 六畳

教員控所 六畳

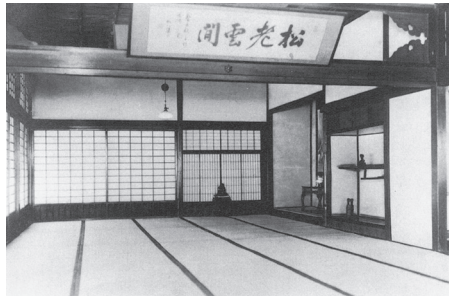
無記入 三畳

以上の他に、勝手・縁側等の記載があります。

写真①がその外観です。まず、軒から下の部分ですが、屋内と縁側との境界、障子の建込まれた部分ですが、よく見ると、ここは一間（約一・八メートル）間隔で立った柱の間に障子が納められた形式になっています。これに対して、縁側は二間（約三・六メー



写真①



写真②

トル間隔で柱の立つ形式になっています。屋根に目を移すと、障子で囲まれた室内部分の屋根と縁側部分の屋根は、一体ではなく、縁側の屋根が室内部分の軒よりも一段下がったところから差し掛けられているのがわかります。室内となる母屋と、縁側部分を構成する庇^{ひさし}が、柱の間隔でも、屋根の形式でも、明確に区別された形式をとっています。写真②は、その内部、教場として使われた部屋です。正面右に、



写真③

東洋大学の学舎は、近代の初頭、この書院造からはじまりました。

蓬萊町時代

哲学館は、明治三二年、この麟祥院を離れて、蓬萊町に移り自立します。写真③がその校舎です。下見板張りで左右対称の新校舎は、所謂西洋館と呼ばれる形式の建物ですが、屋根は棧瓦さんかわです。恐らく、伝統的な木造軸組構法に西洋の意匠をまとった建物であったと推察されます。西洋館は、本家本元のヨーロッパの石造或いは煉瓦造の意匠を前提としているので、多くの場合、木造であっても壁量が多く、開口が少ない表情になります。開口部の形式も、それまでの日本の建築とは大きく異なり

棧が細かく入った障子の部分がありますが、中央に何か置いてある様子なので、この部分は、少し奥まった形式になっていたものと推察されますが、こうした部分を付書院つけしょいんと呼びます。付書院の成立は中世の寺院内の僧坊や方丈であったと考えられていますが、発生期には、この奥まった部分は机の役割を果たしていました。正面の細かい棧の入った障子は、机のための明り通りの役割を担っていました。その右側にあるのが床の間、更にその右隣にあるのが違い棚と呼ばれる部分です。また、手前の額の取付けられた部分、欄間らんまと呼ばれる部分の下、鴨居と呼ばれる部材ですが、そこには長押ながおしと呼ばれる帯状の角材が取付けられ、中央には釘隠くぎかくしと呼ばれる装飾金物が施されています。一方、柱は、床柱（床の間と違い棚の間の柱）以外、全て角柱が用いられています。このような形式の和室を「書院造」と呼びます。中世に起源を持つ付書院が近世に至って武家の住宅様式としての書院造に発展し、更に、日本の住まいを代表する建築様式となり、少なくとも昭和四〇年代位までは、どこの住宅にも見られた建築様式です。

ます。例えば、中央の突出部分の二階中央には、上部に半円形のアーチを持つ窓が付けられていますし、その左右の縦長の窓は、上げ下げ窓と呼ばれる開口形式で、上半分が下に下半分が上に動く窓です。何方の窓も、近世までの日本建築には見られなかった形式です。開口部へのガラスの導入も大きな変化でした。また、一階と二階が同じ大きさの所謂総二階という形式も近代に入って一般化した建築様式です。書院造から西洋館へという変遷を今日から振り返ると、和風から洋風へという展開との認識になります。勿論、その様な認識は当時も存在する訳ですが、同時に、近代化の必然的な方向性と考えられていました。ここは大切な点なので、そうした考え方を象徴する事実を一つご紹介しておきましょう。

明治二二年に、この校舎が落成した際に円了が行った「移転式の演説」で、彼は、欧米諸国を巡遊した結果、哲学館を改良し日本の大学と言うに相応しい組織とし、学門の独立と共に国家の独立を期したいとの意思を示した上で、哲学館の学問的な独立

の内容として、

一 日本語と日本人教師によって学問すること。

二 我邦久伝の諸学を基本として学科を組織すること。

三 東洋学と西洋学の両方を比較して日本独立の学風を振起すること。

と述べていますが、その器としての建築が所謂西洋館であることには、全く違和感を感じていない様子です。その後、現在の校地に移転した折りに建てられた校舎も西洋館でした。哲学館の建築は蓬萊町以来終始一貫して西洋館です。それどころか、後に詳述しますが、東洋大学の学舎に積極的に和風が採用されたことはありません。この事実、器としての建築が、今日から見ると、様式上は西洋館であったにしても、当時の認識としては、現代的な新しい様式の建築と捉えられていたこと、その認識は、今も変わっていないことを示しています。新しさこそが可能性であった、そう言うてよいでしょう。こうした齟齬^{そご}は、日本近代のあらゆるところに見出されます。私は、こ



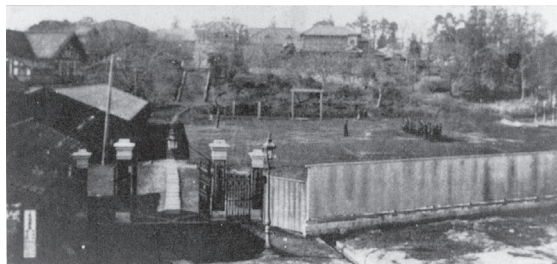
写真④

二 白山移転から敗戦まで

明治期の白山キャンパス

明治三〇年四月、円了は、校地を小石川区原町、現在の白山校地に移すべく、新校舎の建設に着手します。この地は、明治二八年に、東洋大学科と東洋図書館の建設予定地として既に購入済みであった敷地でした。この地に新しく建てられた校舎が、写真④の建物です。ハーフティンバー風を採用した背景には、外遊

の事実を、後進国の現実と捉え、克服すべき矛盾ではなく耐えるべき齟齬であったと考えています。因みに、この齟齬を矛盾と捉えて排除しようとした時代がありました。それは、昭和初期、戦時下での事でした。戦時体制が、事実上絶望と狂気の時代であったことを考えると、明治期のこの天真爛漫さは評価すべき姿勢であったと考えざるべきでしょう。私が、耐えるべき齟齬と申し上げた所以です。この校舎は、明治二九年一二月、隣接する郁文館の失火による火災に巻き込まれて焼失します。この時、井上円了が収集した貴重な書籍も、その一室を占めていた図書室と共に焼失してしまいました。



写真⑤

概説に留めて先に進みますが、時々思い出して考えるべき課題です。写真④の校舎手前に哲学館講堂と図書館閲覧室の建設予定地の立て札がありますが、このうち、講堂の写真は、白山通りからの遠景写真⑤におぼろげに見える程度で、近景は見いだせませんでした。講堂は、草創期の多様な人間模様を育んだ場所でした。

ところで、この遠景写真は、敷地計画、或いは配置計画の点から、もう一つ大切な特徴を写しています。それは、手前の平地に京北中学校が、奥の丘に哲学館があるという配置上の構成と、哲学館が京北中学校の校庭をアプローチとして利用する導線計画になっている点です。円了は、こうした構成を積極的な意図を持って採用した

の影響があると考えerべきでしょう。ハーフティンバー風の外壁は、日本の在来木造の真壁構法に近い表情になりますが、日本の真壁構造には、写真の切妻部分に見られる様な斜材は用いられません。一方、屋根は今回も棧瓦の様です。近代初頭のこの時期、棧瓦は最も汎用的な屋根仕様（防水仕様）でしたし、近世以来の日本の建築を特徴付ける屋根材ですから、この屋根に伝統的な印象を持つのは極めて自然な成り行きですが、近年の研究で、棧瓦自体は近世初頭にオランダで発明され日本に紹介された瓦であったことが明らかにされています。実は、こうした点にこそ日本の建築の多様性と豊かさの源があります。建築様式や技術に関する限り、私達が伝統的なものと考えている表現や技術の多くが、こうした来歴を持っているからです。即ち、私達は、色々な事情から移入された技術や表現を、適時在来構法に組み込み汎用化し、更に時間を掛けて洗練を加え慣れ親しむうちに、それを伝統的な表現として認識する様になる傾向が強いのです。先に言及した書院造もその様な経緯をもっています。ここでは、



写真⑥

ものと推察されますが、この配置形式は、その後も白山キャンパスの最も重要な骨格になりました。

写真⑥の建物、階段を登りきったところにやや奥まって建てられた二階建の煉瓦造が、明治三三年竣工の図書館です。階段と図書館の間には、広場が設けられています。この広場のやや右に講堂があったと推察されます。図書館に煉瓦造を採用した背景には、恐らく蓬萊町での火災があったからと推察されます。残念ながら、図書館も講堂も、昭和一二年には取り壊されてしまいました。

その間、明治三一年一〇月に、京北尋常中学校が認可され早速校舎の建設が始まります。明治三二年、京北尋常中学校は中学校令に従って、その名称を京北中学校と改めます。明治三八年には、京北幼稚園が本郷区駒込富

士前町に建設されます。これで、井上円了の構想した幼稚園から大学に至る一貫教育は、小学校の設置を残すのみとなりましたが、それは遂に実現しませんでした。

戦前の白山キャンパス

大正一二年、東京は、日本の近代建築を大きく転換させることになる災害に遭遇します。関東大震災です。日本の近代は、江戸時代以来繰り返されてきた都市災害としての大火を克服すべく、都市の不燃化を主眼に進められました。これが、煉瓦造採用の技術的な背景でした。一方、煉瓦造に象徴される組積造そせきぞうが必ずしも耐震的ではないとの認識は、徐々に広まりつつありましたが、耐火建築としての信頼から、克服すべき構法との認識には至りませんでした。ところが、関東大震災は、その組積造が耐震的で無いばかりか火災に対しても決して万全ではないことを私達に知らしめたのです。これは大変な衝撃でしたが、同時に、耐火耐震建築としての鉄筋コンクリート造

への転換の大きな契機となりました。以後、日本の近代建築史は鉄筋コンクリートの時代に入ります。

東洋大学では、昭和三年の新校舎の竣工、昭和四年の図書館の竣工、そして、昭和九年の講堂落成を契機に、大学としての姿を整えますが、三棟とも鉄筋コンクリート造での新築です。関東大震災の教訓が生かされたと言つてよいでしょう。

因みに、先に紹介した煉瓦造二階建の図書館はその後改築され、さらに昭和四年六月、新しい図書館の竣工とともに廃館となり、学生の部室及び什器庫としてしばらく使われたものの、昭和一二年には取り壊されるに至っているのです。取壊された図書館は、写真⑥の次の図書館ということになりますが、その経緯から見て、概ね同じ場所に建っていたものと推察されます。一方、木造の講堂も、多くの歴史を残して同時に取り壊しとなっているので、白山キャンパスの旧図書館と旧講堂は、鉄筋コンクリート造の校舎・図書館・講堂の建設と共に順次撤去されていたことになります。明治

三二年の配置図から考えて、ハーフティンバー風の教場は新校舎の建設までに、旧講堂は図書館建設までに、夫々解体されていたことになりましたが、昭和一二年まで残っていたとの記載もあるので、キャンパス内で移築されていたのかもしれませんが。さて、先ほども説明したとおり、煉瓦造の図書館は京北側から階段を登りきった場所よりもかなり奥まった所に建っていた様子なので、階段を登りきると、そこには広場があり、その広場に面して図書館があるという配置になっていたことになります。従つて、新しい図書館と講堂は、その広場の夫々北西と南東に、この広場を会して向合う配置で建設されたことになりました。記録のとおりなら、階段を登った正面に、旧図書館、右に新図書館、左に新講堂という配置であった訳です。

明治三〇年に白山校地に移転し、煉瓦造の図書館が明治三十三年に竣工して以来堅持されてきた、京北中学校を通り抜け階段を登って大学を象徴する広場に辿り着くという構成は、学徒の成長を平面的な奥行きとそれに続く垂直的な階段に託したもので

あったと推察されますが、その構成が、図書館と講堂の完成を契機に、より深い意味を持つものとして完成しつつあったと言ってよいでしょう。因みに、現キャンパスの中庭は、当時の広場よりは些か奥まった印象ではありますが、概ね同じ位置にあります。



写真⑦

昭和初期の建築様式

さて、写真⑦の図書館と写真⑧の講堂には、デザイン上の共通点があります。それは、正面ファサード中央部に柱状の突起が付けられている点です。建築では、こうした部位をリブと呼びます。この場合は縦リブということになりますが、縦リブは、一般に、建物の外観に垂直方向の表情を与えるために用いられま



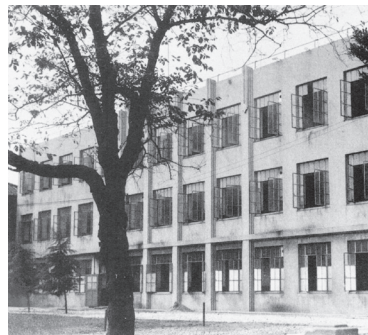
写真⑧

す。その源はヨーロッパのゴシック様式ですが、近代に於いてもゴシックリバイバル或いはネオゴシックと言った名称で繰返し注目を浴びた建築様式です。日本では、日比谷公会堂がその好例です。講堂の方は、その様な説明で良い様に思います。図書館の正面の様な簡便な形式になると、寧ろ縦長の開口部がその役割を担っているとの印象ですが、何れにせよ、広場の左右をゴシック様式の建築が対峙する形で囲んでいたこと

になります。ゴシック様式は、震災復興期を象徴するデザインの一つです。

図書館の建設に先立って、その奥に建てられた、後に三号館と呼ばれることになる新校舎も同じ様式の建物ですが、こちらは、前の二棟とは少し異なった構成になっています。その点に言及する前に、まずは、その全体像を確認しておきましょう。新し

い校舎は、南東側正面から見た姿が、一四スパン（柱間の数）という細長い建物でした。写真⑨を見る限り、この長辺中央を正面にしてデザインされています。講堂に比べるとこちらも遙かにあっさりした外観ではありますが、中央四スパンに縦リブが付されているのがその証です。リブの存在は、三棟とも様式的には統一されたデザインで



写真⑨

あったことを示しています。尤も、両翼は極めて質素で、全く同じ形式の開口部の連続です。わずかに、鋼製建具のガラス割りが繊細な意匠性を感じさせるばかりですが、個人的には、この質素な佇まいに好印象を持っています。もし、今、残っていたら全力で改修してみたいと思う様な可能性に満ちた建物だからです。恐らくは、その予算的な制約から結果としてこの様なデザインになった

ものと推察されますが、後のモダニズムの時代を予感させるデザインです。

この建物が、その後建設される図書館や講堂と少し異なった形式になっている理由は、中央の縦リブで強調された部分の扱いにあります。既に触れた様に、図書館も講堂も同じ形式ですが、この二棟は、デザイン上の正面が正面玄関としての機能を持っていました。垂直性の強調は、同時に、正面入口の存在を強調する役割を担っていました。一方新校舎の方は、デザイン上の正面には正面玄関がありません。手前の立木の左側に、通用口とおぼしき出入口が一ヶ所あるばかりです。新校舎の正面玄関は、デザイン上の建物正面には設けられていないのです。建築的な正面と機能上の玄関の間に齟齬が生じていると言って良いでしょう。

震災を契機に、特段の意識を持って取組まれるようになった耐震耐火性能の追求が、確実に構造費用を増大させ、装飾的な配慮を追いつめていきます。同時に、建築の設計姿勢も、建築用途への従属を深めていきます。新校舎の建築的構成は、こうし



写真⑩

た転換の中で苦悩する設計者の姿を表している様に思われます。しかし、同時に、何処か凜とした清々しさを感じさせるデザインです。

さて、最後に建設された講堂の竣工が昭和九年ですが、ここで、戦前の東洋大学の建築的な展開は終わりを告げます。昭和一〇年代に入ると、資材統制が始まり、日本近代の建築的展開は、昭和二〇年の敗戦まで止まってしまうからです。いやむしろ、破壊の時代に入ったと言った方が事実に近いでしょう。従って、写真⑩が、戦前の東洋大学と京北中学校の最終形ということになります。

三 敗戦から高度成長期まで

占領期のキャンパス

ここまでの記述でも明らかなように、少なくとも、戦前に於いては、私達の大学は決して巨大な大学ではありませんでした。しかし、この様相は、戦後一変します。

戦後を歴史として記述できるかという問いは、今も大きな壁です。勿論、東洋大学のキャンパスの展開が、こうした問題と直接結びつくとは考え難いところですが、結論の出ていない問題、或いは評価の定まらない問題が少なくないのは事実です。例えば、白山校地で繰り広げられた敷地計画上の葛藤は、戦後の東京の都市計画と無縁で

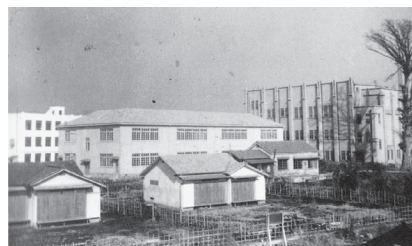
は有り得ませんでしたし、東京への人口の集中と、教育のマスプロ化との間にも深い繋がりがありました。この小冊子では、以上のような論点に注目しつつ、主に白山キャンパスに焦点を当てながら、戦後を、占領期、高度成長期、立地規制とその解除の三期に分けて記述していきたいと思います。

まず、敗戦直後の白山校地の状況からはじめましょう。敗戦直後の白山校地の状況を写真化すれば、恐らくは、先の写真⑩から、木造を取り除いた姿になっていたと推察されます。しかし、実際の被害はそれ以上に大きなものでした。戦前の震災復興期に建設された、講堂、図書館それに新校舎（名称は西校舎を経て日校舎となり創立八十周年記念館の落成を期に三号館へと改称された）の三棟は、鉄筋コンクリート造であったことで焼失を免れたものの、その内部は火災による被害が甚大で、東洋大学は、実質的には、校舎の過半を失った状態にありました。これが、戦後の東洋大学の置かれた現実でした。

東洋大学は、建築的にも財政的にも存亡の危機に有りましたが、戦後も大学であり

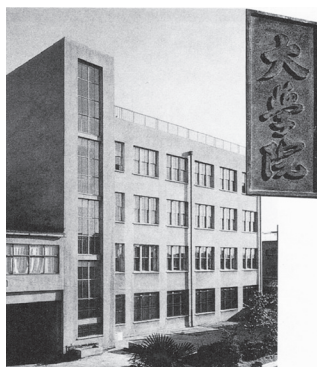
続ける為には、どうしても新制大学としての認可を受ける必要がありました。占領下で行われた大学制度改革に対応する必要がありました。これは喫緊の課題でした。当時、大学が再生の活路と考えたのは白山校地の売却でした。その資金で埼玉県の上福岡に広い校地を得て大学全体を移転しようと考えたのです。しかし、この計画は、アメリカ軍政部の該地解放許可が下されなかったために頓挫してしまいました。解決策がないまま、新制大学への認可申請の期限が迫ったため、とりあえず昭和二十四年度は白山校地に大学を開設する方向で申請を行い、解放許可が下り次第移転するという極めて中途半端な計画で臨むことになりました。白山校地で授業を再開するためには、とりあえず校舎の改修が必要でしたが、この手の改修工事は、必然的に、短期的な使用を前提に、出来る限り広範囲を、限りなく廉価でという方向にならざるを得ません。そして、こうした発注姿勢は、しばしば瑕疵の温床となります。事実、後に建設会社との間で訴訟問題に発展するほどの劣悪な工事で、改修はしたものの校舎として

の機能を充分には果たせないという状態に陥りました。これを教訓に、その後行われた木造校舎の工事発注に際しては、極めて丁寧な業者選定が行われましたが、本来は、鉄筋コンクリート造の既存校舎の改修にこそ手間を掛けるべきでした。写真⑪



写真⑪

は、占領下で建設された木造校舎ですが、敗戦直後のこの時期には、何処でも、こうした形式の建物しか建てられませんでした。所謂木造モダニズムと呼ばれる建築様式の建物です。東洋大学は、移転が出来ない以上、荒廃した校地の再生なくして教育の場の存続は考えられず、校地の売却が出来ない以上、その再生資金の目処は立たずで、殆ど絶望的な状況にあった訳です。新制大学としての東洋大学の建設は、財政難の中、震災復興時の鉄筋コンクリート造校舎の改修と、木造校舎の建設からはじ



写真⑫

まりました。

その後、大学院でも施設拡充を要請され、昭和二九年六月、三号館の後ろに、戦後初めての鉄筋コンクリート造校舎として大学院校舎、写真⑬の竣工に漕ぎ着けますが、財政状況は逼迫の一途を辿っていました。詳述は避けませんが、資金調達のプロセスは実に壮絶なものでした。

本館の建設と広場

この時期の東洋大学の建築を考える上で、最も注目すべきは、最初期に建設された、後に五号館と呼ばれることになる本館校舎の建設です。写真⑬の建物です。東洋大学の建築は、建築家としての立場から見る限り、押並べて工期が短く、それが建築



写真⑬

的には残念な結果をもたらす場合が多いとの印象ですが、この建物も、その点では例外ではありませんでした。しかし、同時に、特別な役割を担うべき建物として、即ち、大学を象徴する広場に正面を向ける建物として構想されています。まず、四聖像のレリーフが取付けられた正面入口には、二つの尖頭アーチが配置され、様式建築の玄関を彷彿とさせる構成になっていますが、建築的には、この尖頭アーチと屋上に設けられた塔以外に装飾的なデザインは見出せません。一方、建物本体は、所謂均等ラーメン構造と呼ばれる柱梁構造の開口部にサッシュを組み込んだ極めて単純な構成です。

正面玄関では尖頭アーチが、屋上ではそびえ立つ塔が垂直性を強調しているのに対して、建物本体は、最上階に付けられたやや深い軒と、それに呼応する各階の水平リ

ブが、横長の開口部と相まって、高さよりは積層感を強調する構成になっています。明らかにデザインよりは機能性を強調したデザインです。ここでは、様式的なデザインと機能的なデザインが併存混在した状態のまま放り出されています。戦後日本で殆ど絶対的な説得力を持った経済性と機能性という要請を背景に、ゴシック様式の影響の強い講堂と図書館を両脇に従えつつキャンパスへのアプローチの正面を担わなければならなかった困惑がそのまま表現されたデザインです。しかし、同時に、何処となく人間的で、今日から振り返ると実に愛すべき建物でもあります。

本館校舎が出来たころの東洋大学が、哲学館開設時に井上円了が構想した学舎の完成形に最も近い、その意味で、最も東洋大学らしい姿をしていたのではないか、私はそう考えています。まず、白山通りに面した門が、現在の八号館の正面あたりになりますが、京北学園と東洋大学を一体として捉えた学舎の正門として中学生から大学生までの幅広い年代の生徒を迎えます。門を入ると、京北学園を貫く真直ぐなアプロー

チとそれに続く階段が、大学生には彼等が抱くべき志の高さを象徴するかの如く、中高生には自らの将来を象徴するかの如く、それ故、彼等と対峙する趣で立ち上がり、階段を登りきったその先に大学を象徴する広場が待ち受けるという構成です。広場の正面には、大学が四聖と仰ぐ、カント・孔子・釈迦・ソクラテスを刻んだレリーフを掲げた本館校舎が、左右に講堂と図書館を従えつつ学生を待ち受けます。実に見事なアプローチではありませんか。もし、大学が当時の規模のまま維持されていれば、もし、京北学園と東洋大学との一体性が堅持されていれば、学舎がこのアプローチを失うことはなかったのではないかとの印象ですが、当時、既に京北学園と大学の関係は極めて悪化しており、京北学園生にとって階段は将来の象徴では無くなっていましたし、大学側はマスプロ教育へと大きく舵を切っていました。京北学園の移転、一二五周年記念館（八号館）の建設、そして京北中学校と同高等学校の附属校化という流れの中にある今日、戦後のこの展開を、歴史的構成の放棄或いは喪失と捉えるか、

夫々の自立と新たな相互理解への避け難い一步と捉えるかは意見の分かれるところですが、井上円了の描いた敷地計画が結局実を結ばなかった事実を考えると、大学が白山の地を離れなかったことが、あるいはそれだけが東洋大学の歴史的継続性の大切な証になっていることに気が付きます。移転の頓挫こそが大学を救ったと言うべきでしょう。少なくとも私はそう考えています。

四 高度成長期

昭和三〇年代の状況

本館の竣工した昭和三十一年は、中野好夫が文芸春秋の二月号に「もはや戦後ではな

い」という一文を発表し、それが「経済白書」に引用された正にその年に当たります。私は、昭和三〇年生まれですから、この題名の意味を長い間知りませんでした。むしろ、当時、多くの人々が、この題名から想像したとされる「もはや貧しく苦しい戦後は終わった」という意味で受けとめていたと申し上げた方が事実に近いでしょう。その原因は、その直後、日本経済が高度成長期に突入したからですが、それは結果論に過ぎません。私が中野好夫の真意を私なりに理解したのは、一九八〇年代末に刊行された『『文芸春秋』にみる昭和史』を通読した時のことです。から、ほぼ三〇年後のことになります。彼の真意は、むしろ敗戦直後の昭和二〇年、例えば長谷川如是閑が同誌に書いた「負けに乘じる」という一文を念頭に、長谷川が批判した状況が中々克服されない事実を指摘した上で、「もはや」その様な「戦後」と決別すべき時期に来ているのではないのかという点にあったとの印象でした。勿論、それは、坂口安吾が「墮落論」の中でその必要性を看破した成すべき「墮落」を当時の私達が既に

達成し、自らの足を、しっかりと地に着けたのだろうかという問いでもあったはずで
す。因みに、私がこれを読んだ一九八〇年代末は、バブル景気の真只中でした。私達の足がしっかりと地面を捉えているとはとても思えない時代でもありました。そう考えると「もはや戦後ではない」という問いは今でも私達の前にあると考えるべきですね。

さて、東洋大学は戦後も白山校地を中心とする大学であり続けた訳ですが、財政上極めてひっ迫した状況にあった事実に変化はありませんでした。昭和三三年九月には、本館校舎裏側への増築工事が開始され、翌年三月に竣工します。増築とは言え、五階建の鉄筋コンクリート校舎で、連日昼夜兼行の突貫工事でした。

ここで、少しだけ川越キャンパスについて触れておきたいと思います。川越キャンパスに構想された理工系学部規模は、当初、理学部、工学部、薬学部、農学部の四学部と、それを支える教養部という実に壮大なものでした。建築家谷口吉郎による基

して、近年の再開発で、図書館を中心に置く、小さな五角形に収束します。写真⑬が現在の姿です。因みに、谷口吉郎は、馬籠の藤村記念堂や上野の国立博物館の東洋館の設計者で、名鉄を説得して明治村を開村し、その初代村長を務めた建築家です。

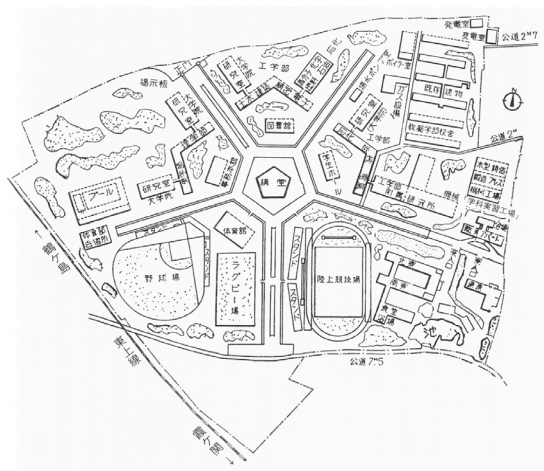


写真⑬



写真⑭（三島勲 撮影）

の頃の姿です。私立大学審議会が工学部開設を許可したのは、なんと開設の年の三月二八日でした。まさに綱渡りでした。その後五角形の構想は、長く留め置かれ、当初の規模での完成は遂に叶いませんでした。そ



写真⑭

本構想は、五角形の講堂を中心に、その各辺の中央から、放射状に学内道路を計画し、その一本が東武東上線の新駅をめざすというこちらも実にスケールの大きな計画でした。校舎は、駅に向かう学内道路に拘わる一辺を除く五角形の四辺に建てられる予定でした。写真⑭がその原案です。実際には、新駅は実現せず、学部も工学部一学部に縮小され、建物も五角形の二辺を構成したところまでの状態で、昭和三十六年、開設に漕ぎ着けます。写真⑮がそ

マスプロ教育の時代

話を白山キャンパスに戻します。昭和三六年ごろから顕在化しはじめた、学生数の増加による白山キャンパスの教室不足は深刻化する一方で、昭和三七年二月、その対策として、白山校地運動場に新校舎の建設が開始されます。後に二号館と呼ばれることになるA号館は、当初、一年に五〇〇坪のペースで建設を続け、四年で二〇〇〇坪の建物を建設するという方針で始まりましたが、事態の深刻化から一年前倒しされ、昭和三九年二月に竣工します。昭和三九年と言えば、東京オリンピックの年です。こうして、教室数は増えつつあったものの、増加の一途を辿る入学者数には追いつかず、二号館竣工直後から、再び教室不足の解消に取組まなければなりません。

昭和三九年の白山祭は、統一スローガンとして、二年連続で「人間を返せ」というテーマを掲げた上で、「くたばれ、マスプロ教育」の名の下に行われました。写真⑬は、その折の五号館です。当時の、授業の様子を、「東洋大学新聞」は「白山四学部



写真⑬

と短期大学部は、さしずめ電車のラッシュアワーのような混乱状態が各教室でおこっている。(中略) として一般教養科目にいたっては千数百人を一堂に集めて行なう。だから、大講堂や中講堂でさえ全員が座りきれず、うしろに立って受講する学生が、座っている学生とほぼ同じくらいいることさえある。(中略) 座席の倍の数が受講しているのである。」と記しています。実に惨憺たる状況でした。マスプロ教育の弊害が、あらゆる場所、あらゆる場面で顕在化しつつありました。

そして、遂に昭和四〇年二月、授業のみならず、定期試験の会場に学生が入りきれないという不手際が発生します。この時は、一応の収拾をみますが、同年九月の定期試験で再度同様の事件が起り、これが東洋大学における混乱の引鉄となりました。以

後、マスプロ教育を巡る学生と大学との葛藤は深刻化し、遂に学内への機動隊導入が繰返されるという事態に立ち至ります。「くたばれ、マスプロ教育」が五号館の正面に掲げられた意味は極めて大きかった訳ですが、事態を回避することは出来ませんでした。

大学側が当時その抜本的解決策として取組んでいたのは川越キャンパスへの教養課程の移転でしたが、これは実現しませんでした。昭和三九年一二月には、昭和四一年度の経営学部開設予定をも視野に入れて、創立八〇周年記念館、後の一号館の建設が開始され、昭和四一年三月に竣工します。写真⑱の建物です。それでも事態は改善されず、昭和四三年には遂にプレファブ校舎を建設して急場を凌ぐというところまで追いつめられます。この校舎を漸く解体することが出来たのは、実に昭和五七年のことでした。

ところで、一号館の完成は、学生の導線も大きく変えました。多くの学生が、一



写真⑱

館側から大学に入るようになったからです。本来のアプローチは、名実ともにその使命を終えつつありました。

昭和四六年、喫緊の課題でありながら長く実現しなかった新図書館が同じく創立八〇周年記念事業として漸く竣工します。更に、昭和五一年には七号館が竣工し、その後、旧七号館と八号館（プレファブ校舎）の解体を契機に、小さいながらも植栽とベンチを備えた憩いの場の建設に至ります。以後も施設の拡充は続きますが、論点を白山校地内の教学施設に、時代を高度成長期に絞れば、概ねその全体像をお話出来たと思います。これを、高度成長期に於ける白山キャンパスの完成と捉えるか、形振りかまわぬ増改築の繰返しが終



写真⑱

にむかえた限界と捉えるかも意見の分かれるところですが、少なくとも、写真⑱を見て、まだ余地があると考える人はいないでしょう。完成と捉えるにせよ限界と考えるにせよ、以後の拡充は、外に敷地を求める以外に術は無くなった訳です。

五 立地規制の導入とその解除

立地規制の導入

混乱の中にあつた昭和四〇年代は、狭隘化^{きようあい化}する白山キャンパスの問題を抜本的に改善する為に、再び教養課程の移転が模索された時代でもありました。最終的に、川越と白山の中間点である朝霞に土地を得て、漸く朝霞キャンパスの建設に取組むことになるのですが、ここでも農地転用、市街化調整区域故の開発行為、埋蔵文化財指定地区故の試掘等の問題が次々と顕在化し、開発は遅々として進みませんでした。その間も事態は益々悪化し、昭和四九年度の学則定員と実員（実際の入学人数）との格差は、経

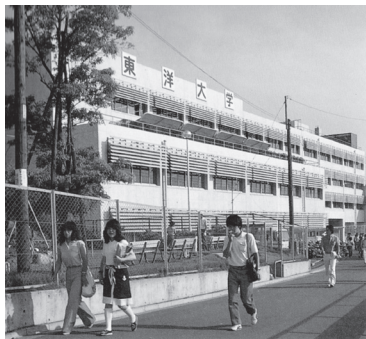
済学部約六倍を筆頭に、白山学部全体の平均でも約三・四倍という状況を迎えます。当時大学は、定員の二・五倍の教員を要していた訳ですから、この状況を改善できなかった最大の原因は、狭隘な白山校地の現状を背景とする施設の不足でした。しかも、昭和五〇年に交付された私立学校振興助成法は、助成の前提として、私立大学に収容定員の管理を明確に求めていましたし、文部省も昭和五〇年一〇月以降は、向こう五年間、学則定員の変更を認めない方針を打ち出していました。東洋大学が充分な国庫補助を獲得するためには、学則定員の改正を行い、学則定員を実員に近づける必要があります。それを実現するには、大学設置基準に見合う校舎、設備等の拡充以外に手立てはありませんでした。

一方、大学立地政策は、「工業等制限法」所謂「工場等立地規制」と「高等教育計画」を根拠として行われていましたが、昭和四〇年代までは他の政策との関連から実質的には機能していませんでした。近年の研究では、昭和五一年の『高等教育の計画

的整備について』をもって「大学立地政策」の開始と考えるのが一般的な評価です。具体的には、昭和五一年以降、指定地域では、大学は規模の拡大が認められなくなったのです。その指定地域の一つが東京都二三区でしたから主要な大学はあまねく、既存地域での規模拡大を許されなくなった訳です。当然、東洋大学も、以後白山キャンパスでの拡充は望めなくなりました。確かに、主要な私立大学が東京の都心部に集中し、そこで高密度化を前提に拡大を続けるという構図には問題がありました。同時に「工場等立地規制」の「等」は常識的には工場に関係する施設を指しており、法の趣旨は、工場及びそれに関連する施設の立地を規制するものであったと推察されます。私立大学の多くが無理な拡大を続けていたが故に、規制当局も拡大解釈で対応しなければ間に合わなかったという話にはなりますが、建築に携わる者としては、法律用語としての「等」が如何に大きな問題を孕んでいるかを考えさせられる事例でもありました。首都圏で、この規制が撤廃されるのは平成一五年のことです。

昭和五十一年三月一二日、漸く朝霞校地に校舎建設の見通しがつき、朝霞での授業計画書と未許可の建築確認申請書（昭和五十一年三月提出済）、それに建築図面しかない段階で、造成中の校地に対する文部省及び大学審議会による視察が行われました。その結果、学生総定員を学部、短期大学を併せて一六二〇名から二六〇〇名に増員することが認可されます。これで定員と実員との差を二倍以内に治めつつ、財政上の困難をひとまず回避するに至ったのですが、工学部同様、こちらも綱渡りに継ぐ綱渡りでした。授業開始も予定どおりにはいきませんでした。実際に朝霞キャンパスでの授業が開始されたのは、当初の予定より半年遅れた昭和五十二年四月からでしたし、白山五学部の教養課程の完全な移転が実現したのは、認可から一〇年後の昭和六一年度のことでした。写真⑳が、完成もない朝霞キャンパスの様子です。

そしてついに平成二年、白山キャンパスの再開発が開始されます。二年後の平成四年に、先ず現一号館、二年後の平成六年に現二号館と三号館、平成一三年には現四号



写真⑳

館、そして平成一五年、現五号館が竣工し、白山校地の姿は一新されました。この再開発では指名コンペ方式で、第二工房の計画案が採用されました。所長の高橋精一氏^{ていいち}は、大阪芸術大学のキャンパス計画を手掛けた大学計画の専門家です。私は、要求規模から考えて最良の選択であったと考えますが、白山移転以来、戦災を乗り越え、度重なる増築でも失われることのなかった広場と、それを取り囲む三つの建物を全て同時に失うことになりました。これを、過去の遺産の喪失という視点から眺めれば、東洋大学は、明治にこの地に移転してきて以来積上げてきた全てを、それこそ白山校地という場所性以外の全てを自らの手で葬り去ったこととなりますし、未来の可能性という視点から眺めれば、都市型大学としての再生を

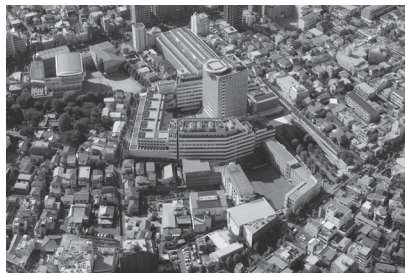
成し遂げたということになりますが、ここでも評価はわかれるでしょう。

立地規制の解除

その後、平成九年には新たに板倉にキャンパスを確保し、生命科学部と国際地域学部が開設されました。写真②は、その現在の姿です。一方、白山では、平成一五年の工場等立地規制の解除を期して購入された敷地に六号館を建設し、平成一七年四月から、再び、白山での文系五学部の四年一貫教育を再開します。大学の都心部への回帰の先駆けとなる再開発でした（写真③）。教養課程の朝霞キャンパスへの完全移転から、二〇年後のことでした。平成二四年の末には京北学園の跡地に一二五周年記念館が竣工し、翌二五年四月からは、新に加わった国際地域学部を含め、文系六学部の四年一貫教育が全て白山キャンパスに集中することになりました。写真③です。これが今皆さんが学んでいる現白山キャンパスです。この間、平成一七年には、それまで白山



写真①



写真② (三島勲 撮影)



写真③ (三島勲 撮影)

キャンパスの教養課程を担っていた朝霞キャンパスにライフデザイン学部が、そして平成二一年には、川越キャンパスに総合情報学部が開設されました。ところで、先程お話した文系五学部教養課程の朝霞キャンパスへの完全移行が実現

した翌年、創立一〇〇周年を迎えた昭和六二年度の入学人数（第一部）が約四〇〇〇人、平成二五年が約七〇〇〇人です。この間、東洋大学は、一貫して拡大を続けてきたことになります。立地規制の解除は、規制緩和の一環であり、再度の集中を可能にしたのは大学の財政的な努力の賜物であり、建築学的には超高層建築技術の汎用化に負うところが大きいのですが、あらためて振り返ってみると、立地規制の導入もその解除も、結果を見る限り、単なる需要喚起の手段に過ぎなかったのではないかとの疑問も払拭し難いとの印象です。今、私達が要請されているのは、少子化とそれを背景とする高齢化社会に向き合いつつ、如何にして大学を維持していくかです。建築的には営繕の時代ということになります。これからが本当の正念場になるはずです。

最後に

以上で、この小冊子は終わりです。紙面が尽きてしまいました。哲学堂の建築と白山以外の各キャンパスの具体的な計画については、稿をあらためることにして、今は、ここまでということにさせていただきます。

なお、本冊子は、戦前については「東洋大学八十年史」を、戦後については「東洋大学百年史」を定本として書かれています。両書については、引用符を付していませんが、年代、事件、人物等は、全て両書によっています。特に、「東洋大学百年史」の信頼性と、折々に繰り広げられた人間模様の生き生きとした記述には敬服するばかり

りでした。せっかくの機会です。在学中に「百年史」を、手に取って読んでみては如何でしょうか。その様におすすめて筆を置くことにします。

皆さんの充実した学生生活を祈念しつつ

東洋大学史ブックレット 10

建築史から見た東洋大学の変遷

二〇一四年三月二〇日 発行

編集

東洋大学井上田了記念学術センター

著者

内田祥士（東洋大学ライフデザイン学部教授）

発行

学校法人東洋大学

東京都文京区白山五―二八―二〇 〒一一二―八六〇六

印刷所

株式会社フクイン



東洋大学